

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02871

研究課題名(和文)日本語教育における反転授業のメタ理論の構築

研究課題名(英文) Construction of the meta theory of the flipped classroom in the Japanese language education

研究代表者

高橋 薫 (TAKAHASHI, KAORU)

創価大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：70597195

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、反転授業で日本語教育の学びの場はどのように変化するのか、深い学びを導くには何が必要かを明らかにすること、反転授業上の著作権問題を整理し、日本語教師を対象とした著作権セミナーを開発することである。調査の結果、反転授業は低位層の学習者の底上げになること、文法学習を反転させることで、対面授業では語彙学習にも学習者の注意が向けられることがわかった。また、深い学びを導くには、何を反転させるかだけでなく反転させた後の対面授業をどのようにデザインするかを含めて考える必要がある。開発した著作権セミナーでは、参加者は著作権に関する理解が進み、セミナーの内容を肯定的に受け止めていることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、日本語教育に反転授業を導入するとどのような効果があるのか、反転授業を導入した対面授業の場では何が起きているのか、深い学びを導くにはどのようなデザインが必要かを明らかにすることができた。加えて、反転授業を行う上で教師が不安に感じている著作権の問題を整理し、日本語教師を対象とした著作権セミナーを開発した。これらの研究で得られた知見は、『オンライン授業を考える-日本語教師のためのICTリテラシー』くろしお出版(第2章1節、第3章を分担執筆)、『教室へのICT活用入門』国書刊行会として出版されたことから、日本語教育の現場でICTを活用しようとしている実践者の一助になったと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this study were to clarify how the learning environment of Japanese language education changes in flipped classrooms and what is needed to lead to deeper learning, to sort out copyright issues on flipped classrooms, and to develop a copyright seminar for Japanese language teachers. The results of the survey showed that flipped classrooms can raise the level of lower level learners, and that flipping grammar learning can also focus learners' attention on vocabulary learning in face-to-face classes. In addition, in order to lead to deep learning, it is necessary to consider not only what to flip but also how to design the face-to-face class after flipping. In the copyright seminar that we developed, we found that participants had a better understanding of copyright and had a positive perception of the seminar content.

研究分野：日本語教育

キーワード：反転授業 著作権

1. 研究開始当初の背景

知識伝達型の教育からアクティブラーニングへの教授パラダイムの転換などから、反転授業 (flipped classroom)への関心が高まった。学習者の多様化が進む日本語教育の領域でも、日本語教育学会が2014年から2016年にかけて毎年反転授業の教師研修を行うなど、多様な学習者の個人差を補完する一つの手法として関心が高まっていた。しかし、反転授業にはどのような効果があるのか、反転授業を導入した対面授業の場では何が起きているのか、深い学びを導くにはどのようなデザインが必要か、という学びの深さにまで踏み込んだ研究は、日本語教育ではほとんど見られなかった。加えて、反転授業では、デジタルコンテンツを自作することに対する技術的なハードルや、教材をLMSなどにアップロードする際に生じる著作物利用の許諾申請など、著作権に関する心理的なハードルがあり、関心を持ちつつも二の足を踏んでしまう教師が多かった。著作権法第35条では、学校教育機関における対面授業での著作物の利用に関しては、一定の範囲内で複製が許容されているものの、本研究を開始した2017年当時は、対面授業外でデジタルコンテンツを視聴する反転授業は、著作権法では「授業」の範囲とはみなされていなかった。(コロナによるオンライン授業の広がりに伴い、公衆送信補償金制度が整備されたのは2021年度以降である。)また、民間の日本語学校は著作権法が定める「学校」の範疇に入らないことが多く、著作物の利用には基本的に許諾が必要になり、問題をより複雑にしていた。以上のことから、教育現場に反転授業を普及させるためには、反転授業にはどのような教育効果があるのか、また、安心して反転授業を行うためにはどのように著作権の問題を解決していくのかを明らかにすることが急務であった。

2. 研究の目的

本研究では日本語教育の実践者が協働で反転授業の実践を俯瞰的に調査・分析し、日本語教育に反転授業を導入することで学びの場はどのように変化するのか、反転授業で深い学びを導くには何が必要か、メタ理論を構築することを目的とする。加えて、反転授業における著作物の利用の問題を整理して、日本語教師を対象とした著作権セミナーを開発し、現場の教育実践の一助とすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、(1)2012年から2016年3月までに発表された日本での反転授業関連の論文をCiNiiで検索し、その傾向と反転授業を日本語教育に取り入れるための留意点を明らかにする。次に反転授業の実践研究を行い、(2)通常の対面授業のクラスと反転授業を導入したクラスの成績を比較する定量的な研究と、(3)反転授業を導入した日本語文法クラスの対面授業での学習者同士の発話の分析から、学びの場で何が起きているのかを明らかにする。そして、(4)日本語教育で反転授業を導入し、深い学びを引き出すためには何が必要か提案を行う。また、反転授業に安心して取り組むために、(5)教育における著作物の利用について情報を整理して、(6)日本語教師を対象にした著作権セミナーを開発し、実践研究を行う。

4. 研究成果

(1) 反転授業のレビューを通じた日本語教育への提言

CiNiiには2012年から2016年3月までに発表された反転授業関連の報告が145件あるが、多くは理工系の取り組みであり、語学教育に関わる実践は10%にも満たなかった。第一の理由は授業形態にあると考えられる。知識伝達型の講義が主流の理工系では、講義部分の動画コンテンツを作成すれば、反転授業に転換しやすい。一方、言語教育では1970年代からコミュニカティブ・アプローチが取り入れられており、必ずしも教師が一方向的に説明するという授業形態が取られていない。そのため日本語教育で導入する場合は、「何を反転させるのか」をより吟味することが求められる。また、日本語教育ではチームティーチングの授業が多い。組織として取り入れる場合、教材の立案、作成、指導をチームで行なうためのマネジメントが必要であると考えられる。第二の理由は、動画作成に関わる技術的な問題である。湯山・篠山(2015)は語学教育における反転授業の報告はほとんどが英語教育であり、英語以外の科目は極めて少ない理由について、高等教育機関では学習者はデジタルネイティブであるものの、授業を担当している語学教員は比較的高齢であり、英語科目を除くとICTを活用した授業に未だに根強い抵抗感を持っていることに言及している。加えて、反転授業用に作成したデジタルコンテンツをLMSなどにアップロードすると、それは著作権法で定められた公衆送信にあたることから、著作物の利用には注意が必要である。

(2) 反転授業の定量的な研究

民間の日本語学校の協力を得て、中級日本語学習者を対象とした反転授業の実践の評価を行った。2015年春学期の通常クラス22名と2016年春学期の反転授業クラス(以下、反転クラス)22名の成績を比較した。その結果、通常クラスに比べて反転クラスはばらつきが少なく、最終成績の得点が有意に高かった($t(42)=2.19, p<.05$)。また、得点のレンジを比較したところ、反転クラスは

全体的に成績が底上げされていることがわかった。これは、反転授業用のビデオ視聴を義務付けたことで学習時間が担保されたこと、さらに、学習者の理解の度合いに応じた個別学習が可能になったことによると推察される。

(3) 反転授業の質的な研究

教室活動が反転授業の成果としてどのように結びついているのかを明らかにするために、大学・大学院進学コースの日本語上級学習者(16名)を対象に調査を行なった。科目は反転授業を取り入れている日本語文法の対面授業で、グループで文法問題の解答に取り組んでいる学習者の発話を録音・録画し、トランザクション分析(Berkowitz & Gibbs 1983)を行なった。あまり発話が活発でなかった2グループ(G1,G2)と比較的発話が活発であった2グループ(G3,4)を比較した。同分析では、表象的トランザクションと操作的トランザクションのうち、後者が相互作用の変化において重要であると考えられている。両者の発話を見ると、操作的トランザクションは発話が活発なグループ(G3,4)に多かった。操作的トランザクションが起こったからといって、必ずしも文法的な正解に至っているわけではなかったが、例文作成で使われる語彙お互いが理解できるまでやりとりを行なっている様子が窺えた。これは、文法の習得という側面から見ると不完全ではあるものの、日本語習得という広い枠組みで見ると、問題に出てくる語彙などに関心を持って考えているような場面は、学びが深まっていると捉えることができる。従来の授業形態では、文法に集中して語彙の部分にフォーカスできなかったものが、反転授業によって学習者は意味的なものに目を向ける余裕ができた可能性がある。

(4) 日本語教育における反転授業で深い学びを引き出すためには何が必要か

反転授業は、アクティブ・ラーニングを実現する授業形態の一つに位置付けられる。説明中心の講義動画の視聴などを事前学習として課し、その後の対面授業で知識の定着や理解の促進、あるいは、発展的な応用力を身に付けるための活動が企画される。言い換えるなら、一連の活動において学習者の能動的で主体的な参加を促し、それが深い学びに繋がるようにするには、何を反転させるかだけでなく、反転させた後の対面授業をどのようにデザインするかを含めて考える必要がある。本研究では近年第二言語教育で注目されている TBLT(Task-based Language Teaching:タスク中心の教授法)と CLIL(Content and Language Integrated Learning:内容言語統合型学習)を取り上げ、理論的基盤や特徴を紐解き、両者の比較を基にアクティブで深い学びを引き起こすデザインへのアプローチについて検討した(表1)。CLILはヨーロッパの言語政策にも関わる理念を実現する装置であり、教育活動を立案・実施するための枠組として、内容(Content)、言語(Communication)、思考(Cognition)、協学(Community)の「4つのC」が示されている。TBLTは第二言語習得などの理論を実践に移す装置だと言える。興味深いのは、TBLTに、授業デザインのための基本原理が見当たらない点である。これは、TBLTがポスト・メソッドの教育法であり、一定の教育方法を超えた存在であるためとも解釈できる。授業デザインの観点から見ると、TBLTでは課題遂行が学習目標になっており、can-do statementsの

表1 TBLTとCLILの比較

	TBLT	CLIL
背景 (理論的基盤・理念)	インタアクション仮説、インプット仮説、気づきの仮説、教授可能性、 Focus on Form タスクが学習を指導する ポスト・メソッド、経験主義	ヨーロッパ市民性、言語多様性 複言語複文化主義
基本的枠組み		4C 内容(Content) 言語(Communication) 思考(Cognition) 協学(Community)
学習目的	言語学習	言語学習、教科学習
学習目標	課題遂行能力・言語能力	教科知識・言語能力・思考力・コミュニケーション力
指導内容	タスク	トピック・教科
評価対象	課題遂行・言語	言語・内容
教師	語学教師	教科教師・語学教師(できれば非母語話者)
頻度・回数	単発的～定期的	単発的～定期的
比率	授業の一部～授業の全部	授業の一部～授業の全部
使用言語	目標言語	目標言語・共通語・母語
長所	流暢さと正確さが学べる	多重知能と記憶メカニズムへの働きかけ オーセンティシーとモチベーション
欠点	言語を体系的に学べない	基礎力のない学生に負担

ような形で遂行すべき課題を明確に設定し、それを目標にいかにかアクティブで深い学びを組み立てるかが重要であろう。一方、CLIL は、教科内容や扱うトピックなど学習内容が既に決まった段階からの授業デザインとなる。この内容に対して、「4 つの C」のうちの残りの言葉・思考・協学の観点について、深い学びになるようなタスクを検討することが求められよう。いずれの場合も「内容」と「タスク」は切り離せない関係にあり、これらを踏まえて教室内外の学びをデザインする必要がある。

(5) 教育における著作物利用の問題点

著作権法では、反転授業などで教材を web 上にアップロードするとそれは「公衆送信」と見なされることが多く、教材の作成には注意が必要である。また、日本国内では、著作権法第 35 条が定める「学校」教育機関では、一定の範囲内であれば著作物を複製することが許容されている（著作権法第 35 条ガイドライン協議会 2004）ものの、民間の日本語学校の中には著作権法第 35 条が定める「学校」にあたらぬ教育機関も多く、著作物の利用には許諾申請を求められることが多い。コロナ以降、オンライン授業が広く一般的に行われるようになり、2021 年度に「公衆送信補償金制度」が導入された。これに伴い、公衆送信補償金を支払っている「学校」教育機関の「授業」での利用であれば、対面授業と同じように著作物が利用できるようになった。しかし、授業期間を超えて著作物を LMS 上にアップロードしたり、授業では取り扱わない部分も複製して LMS を通して配布したりすると、それは「著作者の利益を不当に害する」とみなされる危険性がある。このような著作権リテラシーは一朝一夕に身につくものではなく、教員研修だけではなく教員養成課程から取り上げる必要があるだろう。

(6) 日本語教師を対象にした著作権セミナーの開発

教育における著作物の利用の問題点を整理し、パイロットスタディを行なった上で、日本語教師を対象としたワークショップ型の著作権セミナーを開発し、実践を行なった。セミナーをデザインする際には「著作権法上やってはいけないこと」を列挙するのではなく、「何ができるのか」「どうすればできるようになるのか」を体験的に学ぶことができるように配慮した。セミナーでは、授業で使える既存のデジタル教材を紹介し、デジタル教材を利用するときの注意点（「学校」か否か、「授業」か否か、「著作者の利益を不当に害しないか」という判断のポイントを提示した。そして、日本語教材の作成に関連しそうな映像の著作権と書籍の著作権についてとりあげ、提示した画像が著作物か否か、それはなぜかをグループで考えるタスクを行なった。最後に「自作教材を作るときの留意点」を取り上げ、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス（以下、CC ライセンス）の考え方を導入した。これは、著作物の利用者側の視点だけでなく、権利者側の視点から著作権を捉えることが、教育における著作物の利用を考える上で重要だからである。セミナーの前後でアンケート調査を行なったところ、著作権に関する理解が進み、ワークショップ形式の参加型のセミナーが参加者に肯定的に受け止められたことがわかった。

開発した著作権セミナーをプロトタイプとして、著作権の反転授業ビデオ（「著作物とは」「著作者とは」「著作権とは」）を作成し、日本語教員を目指す学部生（日本人学生 13 名、留学生 8 名）を対象とした反転授業型の著作権セミナーを行なった。参加者には事前にビデオを視聴してもらい、著作物の権利者と利用者に分かれて、権利処理のロールプレイを行った。教示は次の通りである。「利用者：あなたが所属する教育機関で、DA PUMP の『U.S.A.』の振り付けをコピーして動画を撮影し、その動画を YouTube に投稿したいと思っています。権利者（KENZO 氏、Avex）に対して許諾申請の交渉を行ってください。どのような条件なら許諾が得られるか、作戦を練りましょう。」「権利者：教育機関からあなたが創作した振り付けをコピーし、YouTube に投稿したいという申し出がありました。許諾を出すための条件を考えてください。交渉の最後には許諾を出すようにしてください。」セミナーの前後で著作権に関わるアンケート調査を行なったところ、すべての学習項目で有意に得点が向上していた。加えて、本実践は参加者の興味を引き、学んだ知識を活かせそうだと感じており、著作権に関する自信を深めていること、また、学習した内容に満足していることがわかった。

引用文献

- Berkowitz, M. W., & Gibbs, J. C. (1983) Measuring the developmental features of moral discussion. *Merrill-Palmer Quarterly*, 29(4) : 399-410.
- 湯山 トミ子, 篠塚 麻衣 (2015) e-Learning 活用型中国語教育“游”における「反転授業」の試み：大学初修外国語教育多様化時代に向けての考察 特定非営利活動法人日本 e-Learning 学会 会誌 15 : 42-51.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 保坂敏子	4. 巻 30
2. 論文標題 オンライン遠隔日本語授業の背景とデザインの視点, 同価値理論・プレゼンス理論の提案	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小出記念日本語教育研究会論文集	6. 最初と最後の頁 123-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本かおる・尹 智鉉	4. 巻 30
2. 論文標題 ハイフレックス モデルとは何か	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小出記念日本語教育研究会論文集	6. 最初と最後の頁 105-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本かおる	4. 巻 6
2. 論文標題 コロナ禍における日本語教師と授業のオンライン化	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Global studies (武蔵野大学グローバルスタディーズ研究所)	6. 最初と最後の頁 129-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 保坂敏子	4. 巻 21
2. 論文標題 日本語教育における遠隔教育 オンライン授業のデザイン指針を探る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要	6. 最初と最後の頁 177-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 手塚まゆ子, 高橋薫, 森朋子	4. 巻 49
2. 論文標題 反転授業における相互作用のある対話の分析 -日本語上級クラスの文法科目を対象に-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 39-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.21808/KJJE.49.03	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤本かおる	4. 巻 19
2. 論文標題 日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関する研究 担当教師へのインタビューを中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本e-Learning学会誌	6. 最初と最後の頁 27-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32144/jela.19.0_27	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 保坂敏子	4. 巻 5
2. 論文標題 文化認識の多様性と多層性 映像作品から何を「日本文化」と捉えるか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 第5回スペイン日本語教師会シンポジウム発表論文集	6. 最初と最後の頁 17-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 保坂敏子	4. 巻 20
2. 論文標題 日本語教育におけるデザイン研究のすすめ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要	6. 最初と最後の頁 157-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋 薫, 保坂 敏子, 宇治橋 祐之, 我妻 潤子	4. 巻 42 (suppl)
2. 論文標題 日本語教員を対象とした著作権セミナーの試行と評価	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 129-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15077/jjet.S42066	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中溝 朋子	4. 巻 15
2. 論文標題 日本語中上級文法クラスの反転授業の実践 : 対面授業におけるグループ学習の状況	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大学教育 山口大学大学教育機構	6. 最初と最後の頁 14-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計29件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 12件)

1. 発表者名 「教育へのテクノロジー導入に必要な知識・スキル・マインドとは」
2. 発表標題 藤本かおる・尹智鉉
3. 学会等名 日本教育工学会2022年春全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤本かおる
2. 発表標題 コロナ禍における授業のオンライン化に関する日本語教師の取り組み オンライン授業の実践に関する教師へのアンケートから
3. 学会等名 日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 手塚まゆ子
2. 発表標題 反転授業におけるグループワーク再考 話し合いの中の個人的活動と共同的活動
3. 学会等名 日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤本かおる
2. 発表標題 コロナ禍による授業のオンライン化に対する日本語教師の取り組み -オンライン直前, オンライン直後の教師へのアンケートから
3. 学会等名 日本教育工学会 2020年秋季全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤本かおる
2. 発表標題 コロナ禍による授業のオンライン化への日本語教師の対応
3. 学会等名 情報コミュニケーション学会第28回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤本かおる
2. 発表標題 講義をオンライン化するときに必要なこと
3. 学会等名 アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会 オンライン・ラーニングカフェ(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋薫、佐藤広子、康潤伊、佐々木さくら、柴田香奈子、下園勇磨、鈴木道代、高橋博美、寺本羽衣、仲井間静香、福博充
2. 発表標題 オンライン講義でアクティブラーニングは可能か？ 「 学術文章作法 」における実践
3. 学会等名 アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会 オンライン・ラーニングカフェ（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 保坂敏子
2. 発表標題 遠隔教育による日本語教育 - 効果的なオンライン授業を探る -
3. 学会等名 オンライン香港日本語教育セミナー（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 保坂敏子
2. 発表標題 アクティブラーニングのための反転授業デザイン
3. 学会等名 オンライン香港日本語教育セミナー（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 保坂敏子
2. 発表標題 映像作品を介したオンライン授業のデザイン - 『文化翻訳』を重視して -
3. 学会等名 BATJセミナー（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 保坂敏子
2. 発表標題 オンライン授業のデザイン -学び続ける日本語教師-
3. 学会等名 令和2年度日本語学校教育研究大会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 手塚まゆ子, 高橋薫, 森朋子
2. 発表標題 反転授業における相互作用のある対話の分析 -日本語上級クラスの文法科目を対象に-
3. 学会等名 韓国日語教育学会 国際学術大会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋薫, 我妻潤子
2. 発表標題 学部生を対象とした著作権リテラシー育成の反転授業の実践
3. 学会等名 韓国日語教育学会 国際学術大会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤本かおる
2. 発表標題 共修で学ぶデジタルコンテンツ作成スキルの育成 -日本語教師養成科目を履修する大学生への実践-
3. 学会等名 韓国日語教育学会 国際学術大会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 保坂敏子
2. 発表標題 反転授業における深い学びを引き起こすためのデザイン - 改訂版タペストリー・アプローチの提案 -
3. 学会等名 韓国日語教育学会 国際学術大会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 保坂敏子, 島田めぐみ
2. 発表標題 日本語教育専門家の育成のためのICTを使った主体的・対話的で深い学びの実践
3. 学会等名 The 8th International Conference on Computer Assisted Systems for Teaching & Learning Japanese (CASTEL/J 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 保坂敏子
2. 発表標題 遠隔教育が拓く日本語教育の可能性
3. 学会等名 シンポジウム「日本語教育における遠隔教育の現状と今後の展望」(東京外国語大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 保坂敏子, 藤本かおる
2. 発表標題 改訂版タキソノミーから見たJFスタンダードの特徴
3. 学会等名 2019年度日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋 薫,保坂 敏子,我妻 潤子
2. 発表標題 日本語学校の教員のための著作権教育の実践報告
3. 学会等名 日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤本かおる
2. 発表標題 日本研究におけるサブカル(チャー)科目の実践
3. 学会等名 The 24th Princeton Japanese Pedagogy Forum, Princeton University
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤本かおる
2. 発表標題 日本研究科目におけるサブカルチャー授業-日本人学生と留学生の協働学習の意義と可能性-
3. 学会等名 日本語教育国際研究大会Venezia ICJLE 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋薫・倉本文子・山本弘子
2. 発表標題 中級日本語学習者を対象とした反転授業の実践と評価
3. 学会等名 CASTEL/J 2017 IN WASEDA (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤本かおる
2. 発表標題 日本語アカデミックライティング授業における反転授業の実践
3. 学会等名 CASTEL/J 2017 IN WASEDA (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 倉本文子・横田希
2. 発表標題 反転授業を取り入れた初級文法授業のデザイン-話す練習を増やす取り組み
3. 学会等名 日本語教育振興協会平成29年度日本語学校教育研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋 薫・宇治橋 祐之・我妻 潤子・保坂 敏子
2. 発表標題 デジタル教材を活用したい語学教員のための著作権セミナーの開発
3. 学会等名 日本教育工学会第33回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤本かおる
2. 発表標題 日本語教育におけるブレンディッドラーニングの概要 - 先行研究の調査から -
3. 学会等名 第32回韓国語教育学会国際学術大会 企画 日本におけるブレンディッドラーニングの実践報告(企画発表)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 保坂敏子
2. 発表標題 聴解授業におけるブレンディッドラーニングのデザイン
3. 学会等名 第32回韓国日語教育学会国際学術大会 企画 日本におけるブレンディッドラーニングの実践報告(企画発表)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 手塚まゆ子
2. 発表標題 日本語文法科目における反転授業の実践と課題 - アクション・リサーチによる振り返り -
3. 学会等名 第32回韓国日語教育学会国際学術大会 企画 日本におけるブレンディッドラーニングの実践報告(企画発表)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋薫・保坂敏子・我妻潤子・宇治橋祐之
2. 発表標題 日本語教師を対象とした著作権セミナーにおけるブレンディッドラーニングの学習環境デザイン
3. 学会等名 第32回韓国日語教育学会国際学術大会 企画 日本におけるブレンディッドラーニングの実践報告(企画発表)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 高橋薫	4. 発行年 2021年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 28
3. 書名 「3章 オンライン授業における著作権とは」『オンライン授業を考える 日本語教師のためのICTリテラシー』山田智久, 伊藤秀明編	

1. 著者名 保坂敏子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 20
3. 書名 「2章 第1節 映像を軸とする対話重視のオンライン授業デザイン」『オンライン授業を考える 日本語教師のためのICTリテラシー』山田智久, 伊藤秀明編	

1. 著者名 藤本かおる	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 160
3. 書名 教室へのICT活用入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>高橋薫 (2020) 「オンライン講義でアクティブは可能か - 『学術文章作法』における実践-」創価大学学士課程教育機構ニュースレター 20, p2</p> <p><セミナー開催> 2017/08/08 「著作権を知ってより良い教材づくりを！-利用者権利者両方の立場から-」日本語学校教育研究大会 2017/09/09 「これだけは知っておきたい著作権！」ことばとまなびでつながるなかまの会 日本語教育の夏フェス 2018/03/10 「日本語教育の最前線 現場のICT活用と著作権」一般財団法人 日本語教育振興協会 第5回近畿地区教育集会「日本語教育の最前線 現場のICT活用と著作権」 2018/11/18 「語学教員を目指す大学生のための著作権セミナー」武蔵野大学 2019/09/07 「映像メディアを授業に取り入れるときの留意点を考えよう！」ことばとまなびでつながるなかまの会 日本語教育の夏フェス 2020/02/16 「反転授業のデザイン再考-TBLTとCLILの観点から」早稲田大学 2020/10/17 「もう一度考えよう、著作権。」ことばとまなびでつながるなかまの会 Zoom開催 2021/02/07 「著作物のフェアユースについて考えよう」Zoom開催</p> <p><講演> 2020/10/24 アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会 オンライン・ラーニングカフェ 「突然オンライン授業を導入することになり困惑しているアナタのための情報交換会」 講演「講義をオンライン化するとき大切なこと」藤本かおる 話題提供「わたしたちはこうやって完全オンライン授業に踏み切った」倉本文子 話題提供「オンライン講義でアクティブラーニングは可能か?」『学術文章作法』における実践 高橋薫, 佐藤広子, 康潤伊, 佐々木さくら, 柴田香奈子, 下園勇磨, 鈴木道代, 高橋博美, 寺本羽衣, 仲井間静香, 福博充</p> <p>2022/02/27 対談「オンライン授業の未来」鈴木克明, 藤本かおる 独立行政法人日本学生支援機構</p>
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森 朋子 (MORI TOMOKO) (50397767)	関西大学・教育推進部・教授 (34416)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤本 かおる (FUJIMOTO KAORU) (20781355)	武蔵野大学・グローバル学部・准教授 (32680)	
研究分担者	保坂 敏子 (HOSAKA TOSHIKO) (00409137)	日本大学・大学院総合社会情報研究科・教授 (32665)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関